

## 日本人の「正しいフランス語」発音への拘り

古川 翠子

日本人におけるフランス語の発音やその教育については、多くの研究者が詳しい分析を行っている。しかしながら、そのなかの多くは「学習者に正しい発音を身に付けさせる」「発音を改善する」というように、学習者の発音が正しくなく、それを矯正すべき、という考えを前提とし、その上でどのようなプログラムを提供するか、どのような学習を促すかを論じている。しかしながら、そもそも「正しい発音・フランス語」の定義自体が曖昧である。フランス語と一口で言っても、フランスのフランス語とカナダやその他の国のそれとは語彙面でも発音面でも全く異なり、同じ国の人間の間にも、地方や個人のバックグラウンドによって、更に個人の間でも差があることは Detey (2019) らが指摘している。一方「教科書を作成、教育を行うためには、常に FR (français de référence) の選択を行わなければならない」ともしている。フランス語の多様性を理解することは重要だが、教えるときにはどれか特定のフランス語を教えなくてはならない。このようにフランス語の多様性が主張されている中で、そもそも目指される「正しいフランス語」とは何か、そしてこれから発音教育はどうあるべきか、何を教えるべきかについて考察した。

そもそも「正しいフランス語」とは何かを考えるためには歴史的背景も必要であるが、Detey (2019) らはフランス革命期に言語的な統一を図るために地方語を駆逐したもののその規範となったのはパリのフランス語であり、規範を定めることが難しかったという歴史的背景を指摘した。フランス国内でさえフランス語の規範を定めようとしても困難であることがわかる。一方で彼が行った実験により、フランス語ネイティブの中にある「正しいフランス語」の存在がほのめかされている。

このように「正しいフランス語」は何らかの形でネイティブスピーカーの中に存在する概念だが、はっきりとした輪郭をもたないものである。何が「訛

りのある・ない発音」か、また「教養のある人の発音」が「正しい」ものだとしても「教養のある人」とは誰かという定義は曖昧である。

発音教育は伝統的に二の次になっていた。その背景には、教科書・教師などに原因があるが、それでも少しずつその重要性が見直されていた。ただアクションネルという発音に重きを置かないアプローチの台頭によりやはり後回しにされる傾向があると考えられる。

また「わかりやすさ (intelligibilité)」は発音においてキーワードとなる。発音教育の目標はしばしば「相手に理解されること」とされるからだ。特に近年のグローバル化や移民事情により口頭の能力はますます重視されることになった。intelligibilité は話者だけでなく、聞き手の問題であることも重要である。

今回の発表では発音教育の現状について考察した。今後はネイティヴの視点を取り入れつつ、フランス語教育において発音教育をどのようにしていくべきかについて研究を進めたい。